

第三章 一条御息所の物語 行き違いの不幸

[第一段 御息所、夕霧に返書]

かしこよりまた御文あり(あちらよりまたお手紙があります)。*心知らぬ人しも取り入れて(事情を知らない女房が取り次いで)、*「ころ」は<事情>だが、此处で言う‘事情’とは少し複雑だ。相思相愛の男女なら情交して別れた朝に手紙の遣り取りがあって互いの誠意を確かめ合い、たっぷり幸福感に浸って、またその夜に会って情趣を愉しむ。そして、それを公然と三日続けると、家同士の公認の間柄となって婚儀を整える、というのが定番の貴族の通い婚様式だった。という世情を前提にして、情交までは至らなかったものの、外形上は結ばれたと見做される夜の対面と朝帰りがあったので、大将は宮に対する誠意を示すために後朝の文を送っていて、礼儀としては宮は返歌を返すべきだったが、宮は大将を拒む気持から返事を出していない、というのが今の状況。つまり女は不誠意を示しているのだが、それでも誠意ある男なら、この日も宮の許に通って来て求婚を繰返す筈ではある。それは宮にとって迷惑なことだが、誠意を示される事は貴女の尊厳を保つために必要であり、男の訪問がなければ軽んじられたという意味にもなってしまう、という切なさだ。そして、この時点で大将からの手紙があるということは、訪問が無い代わりに言い訳をして来ている事を意味する。という‘事情’だ。

「大将殿より、少将の君にとて、御使ひあり(大将殿から少将の君にとということで御文の遣いがありました)」

と言ふぞ(と言うのも)、またわびしきや(それはそれで切ないものよ)。少将、御文は取りつ(少将はお手紙を受け取りました)。

御息所、「いかなる御文にか」と、さすがに問ひたまふ(御息所は、どんなお手紙ですかと、さすがに気になってお尋ねなさいます)。*人知れず思し弱る心も添ひて(自分ひとりの判断では気弱に大将のこの済し崩しの求婚を認める他無いという気になって)、下に待ちきこえたまひけるに(内心では大将の宮の所への通いを待ち受け申しなさっていたところに)、さもあらぬなめりと思ほすも(その訪問がなさそうだとお思いになると)、心騒ぎして(心穏やかならずに)、*「人知れず思し弱る心も添ひて」については、注に<主語は御息所。『集成』は「御息所は、ひそかに、宮を夕霧に許そうと、折れる気持にもなっていて。事ここに及んでは止むを得ないという気持になっていたのである」と注す。>とある。気弱に結婚を認める、ということではあるのだろうが、御息所の不満は‘済し崩しの安っぽさ’にあるのであって、宮の大将との結婚自体は織り込み済みの事だった筈だ。大将の礼を尽くした求婚と盛大な婚儀で宮を正妻の地位に就けることこそが御息所の狙いだったのである。安売りだけはしない。値切り交渉に応じたくはないが、止むを得ず交渉ごとに持ち込まれたとしても、最大限の譲歩は引き出したい。売り手側責任者たる御息所の立場の自己認識は、そんなところだろう。

「*いで(体を許したかどうかに関わらず)、その御文(その大将殿のお手紙には)、なほ聞こえたまへ(今度こそお返事申し上げなされませ)。あいなし(身勝手な主張だけでお返事申さないのは、失礼です)。*「いで」は<いや、しかし>という否定語。だが、是は何に対する否定なのか。「なほ聞こえたまへ(それでもお返事申し上げなさい)」と続くので、直接には、後朝の御文に宮が返事を出さなかった事、に対する否定に見える。が、更に続く御息所の発言内容を見ると、この「いで」は<宮が主張する身の潔白>に対するものである事が文意から汲み取れる。御息所は恐らく、娘の潔白は信じているのだろうが、それが然程は重要でもなく、

世間に通用しない言い訳だという事を十分に承知しているのだろう。だから御息所は、娘を信じる気持とは別に大人の判断として、宮の潔白を主張する姿勢の無効性を教えた、というのが此処の発言の主旨のようだ。その趣旨に添って、「いで」および「あいなし」を明示補語する。

人の御名を善さまに言ひ直す人は難きものなり(人が立てたあなたの悪名を事実無根と言い直す事は出来ません)。そこに心きよう思すとも(あなたが潔白を言い張っても)、しか用ゐる人は少なくこそあらめ(それを信じる人は少ないでしょう)。*心うつくしきやうに聞こえ通ひたまひて(体裁を整えるように無難に文通なさって)、なほありしままならむこそ良からめ(今までの関係を壊さない事が大事です)。あいなき*甘えたるさまなるべし(返事をしないなどというのは、失礼で世間に甘えた態度で、先が思い遣られます)」 *「こころうつくし」は<可愛らしい感じで素直である。>と古語辞典にある。「うつくし」は<他人の目に映る>という語感だろうか。外形上、社会通念上、失礼のない体裁を整える事の、社会生活上の重要性を言っているらしい。安売りはダメだが、売れなくては話にならない、という実情。 *「甘えたるさまなるべし」は今でも良く言う叱責の文句。世間に甘えるな、という言い方だが、実際には大将に見限られては生活に困る、という切実さ。勿論、律師が言うように藤原殿を初め頼れる人は大将の他にも居るかと思うが、御息所の親心には、宮の女冥利に適うのは源君に思えたのだろう。病床にあって、遠くない自分の死後、世間知らずの娘の先行きが不安でならない、という御息所の焦りかと明示補語する。

とて(と言って)、召し寄す(お手紙を差し出させなさいます)。苦しけれどたてまつりつ(少将は気重に御息所にお渡し申し上げました)。

「あさましき御心のほどを見たてまつり表いてこそ(朝の手紙のお返事も頂けないという意外なほど率直なあなたのお気持をはっきりと拝見いたしましたので)、なかなか心やすく(こちらも遠慮せず)、ひたぶる心もつきはべりぬべけれ(気持を申し上げ易くなりました)。

せくからに浅さぞ見えむ山川の、流れての名をつつみ果てずは」(和歌 39-08)

拒む所が愛らしく、ますます燃える私です」(意識 39-08)

*「せく」は「塞く」で<堰き止める←会うのを拒む>ということらしい。「からに」は<～ということによって、～する程に>。歌筋は、堰き止めると底が見えて一山あった後の川で、ますます流れ着いたものを隠せません、という軽口調。しかも、「浅さぞ見えむ」は「あさましき御心のほど」を<底が見える、浅ましが分かる>という雑言だ。「流れての名」は<流言される浮名>であり<流れに残った本命の自負>でもある。その上で、「つつみ果てずは」は男根の逞しさを思わせる下品な響きもありそうだ。自信満々の大将が宮に「浅さぞ見えむ」と言い放つは、如何にも「なかなか心やすく」ある。

と言葉も多かれど(と言葉の多い文面のようだが)、*見も果てたまはず(その赤ら様な物言いに御息所は気恥ずかしく最期までお読みなされません)。 *「見も果てたまはず」は、大将の「ひたぶる心もつきはべりぬ」という余りにも赤裸々な直情をずけずけという物言いに、御息所は思わず赤面したという艶談なのだろう。

この御文も(この大将の御手紙も)、*けざやかなるけしきにもあらで(礼儀正しいあざやかな武官らしい態度ではなく)、めざましげに心地よ顔に(目障りなほど得意気に)、今宵つれなきを(今

宵欠席の言い訳を言う誠意の無さを)、いといみじと思す(実に心外にお思いになります)。*「けざやかなるけしき」はくあざやかな態度。御息所の価値観に則した「あざやかさ」とはく近衛大将たる礼節ある派手さあたりだろう。

「故督の君の(こかんのきみの、亡き衛門督であった藤原の君の)御心さまの思はずなりし時(宮への御愛情が深くないと知った時に)、いと憂しと思ひしかど(とても情けなく思ったものだが)、おほかたのもてなしは(表向きの接遇は)、また並ぶ人なかりしかば(他に正妻はいなかったので)、こなたに力ある心地して慰めしだに(宮の対面は施せた気がして安堵していたが)、世には心もゆかざりしを(夫婦関係としては満足できるものではないという薄幸だったのに)。あな(ああ今度は)、いみじや(本当に懸念される)。*大殿のわたりに思ひのたまはむこと(藤原殿縁故の大将の北の方の出方が)」*「おほとどのわたり」はく藤原殿の縁故者。みたいな言い方だが、上の「また並ぶ人なかりしかば」と二章二段の律師の「本妻強くものしたまふ。さる、時にあへる族類にて、いとやむごとなし」とを受ける文脈からして、この「大殿のわたり」はく藤原殿の娘である大将殿の北の方。なのだろう。

と思ひしみたまふ(と御息所はしみじみお思いになります)。

「なほ(それでもなお一応は)、いかがのたまふと(北の方が如何仰るか)、けしきをだに見む(様子を見てみよう)」と(と御息所は)、心地のかき乱り(気分が掻き乱れて)*くるるやうにしたまふ目、おし絞りにて(見え難くなっているようであらう)しやる目の涙を拭き絞って)、あやしき鳥の跡のやうに書きたまふ(変な鳥の足跡のような字で返事を代筆なさいます)。*「くるる」は「暮る(くる、暗くなる・目が曇る)」の連体形。涙に暮れて、見え難くなっている様。

「頼もしげなくなりにてはべる訪らひに(私の弱ってしまいました容態を見舞うために)、渡りたまへる折にて(宮がお越しなさった所なので)、そそのかしきこゆれど(御返事を差し上げるように、お勧め申しましたが)、いとはればれしからぬさまにものしたまふめれば(宮はとても気分が晴れないようにしていらっしゃいますので)、見たまへわづらひてなむ(見かねまして、私が代返申し上げます)。*此処の文は、訳文と校訂された原文を見比べながら、特に原文の敬語遣いから主語を確かめて、やっとどうにか文意を汲んだが、初めて原文を見た時は全く意味不明だった。尤も、そういう事は多々あるが、この帖は今までもかなり分かり難い文が多かった気がする。主語および対象語の省略は当然に文意が分かり難いが、写本の画像サイトなどを見ると、改めて校訂の苦心が窺える。

女郎花萎るる野辺をいづことて、一夜ばかりの宿を借りけむ」(和歌 39-09)

手に取ってみた野辺の花、一夜限りと泣かすのか」(意訳 39-09)

*歌筋は、渋谷訳文に「女郎花が萎れている野辺をどういっておつもりで、一夜だけの宿をお借りになったのでしょうか」とあり、注にはく「女郎花」を宮に、「野辺」を小野山荘に喩える。『集成』は「今宵の訪れのないのを責めた歌であるが、同時に、母親として娘を許すという意志表示にもなっている」。『完訳』は「二人の結婚を前提に夕霧の訪れぬのをなじる歌」と注す。>とある。また、注にはく『河海抄』は「秋の野に狩りぞ暮れぬる女郎花今宵ばかりの宿もかさなむ」(古今六帖二、小鷹狩)を指摘。>ともあって、「女郎花」を詠み込む歌の風流について幾らかの示唆をしているようだ。そして、この歌の急所は恐らく、そのく「女郎花」を詠み込む歌の風流にあるのだろう。でなければ、歌筋も其処に乗せた思いも、余りに理が立って非難がましく、情緒の味わいが無い。で、「女郎花

(をみなへし)」だが、大辞泉にはくオミナエシ科の多年草。日当たりのよい山野に生え、高さ約1メートル。葉は羽状に裂けていて、対生する。夏の終わりから秋に、黄色の小花を多数傘状につける。秋の七草の一。漢方で根を敗醬(はいしょう)といい、利尿剤とする。おみなめし。《季 秋》>とあり、古語辞典にはく歌では多く女性にたとえる。>ともある。ということは、どうやら「女郎花」はく秋の野の花＝山郷の女>を象徴するもののようでく町の花＝都の女>とは違う存在を印象付ける語であるらしい。「Wildwood Flower」や「Ramblin' Rose」みたいな感じだろうか。その趣きが旅寝や仮寝の情緒と絡んで新鮮な印象となり、時には本妻とは別の女を意味し、その女が「しをるる(泣いて悲しんでいる)」と男に訴える絵に成るところが、この歌で「女郎花」を詠み込む風情なのだろう。また、「をみなへし」の語感だが、「をみな」は「女(おんな)」のこととあるが、「へし」は良く分からない。「経し」だとすればく手を付けた女＝思い出の女>みたいな響きにもなりそうだが、そういう説明は見当たらない。が、「をんな」と言うだけで、この物語では閨の場面を示すように、情事を想起させるのだろう。

と、ただ書きさして(とだけ書き付けて)、*おしひねりて出だしたまひて(立て封をして出しなさって)、臥したまひぬるまゝに(臥せってしまいなさったまゝに)、いといたく苦しがりたまふ(とてもひどくお苦しみになりなさいます)。*御もののけのたゆめけるにやと(御息所が少し御気分がよろしかったのは、物の怪が一時休んでいたからだろうか)、人びと言ひ騒ぐ(女房たちは言い騒ぎます)。 *「おしひねりて」はく捻り文にして>と訳文にある。「ひねりぶみ」はく手紙の様式の一つ。「たてぶみ」に同じ。>と古語辞典にある。「たてぶみ」はく書状の形式の一。書状を礼紙(らいし)で巻き、その上をさらに白紙で包んで、包み紙の上下を筋違(すじか)いに左、次に右へ折り、さらに裏の方へ折り曲げるもの。折り曲げた部分を紙縫(こより)で結び、表に名を記す。捻(ひね)り文。>と大辞泉にある。ざっと、縦長の上下を折り封したものの、なのだろう。 *「御もののけのたゆめけるにや」は注にく女房の詞。今まで御息所の気分が良かったのは、の意が省略されている。>とある。従って、明示補語する。

例の(いつものように)、験ある限り(げんあるかぎり、霊験のある僧たちばかりで)、いと騒がしうののしる(それは大声で祈祷を上げます)。宮をば(宮を物の怪から避けるべく)、*なほ、渡らせたまひね(やはり、お離れ下さい)と、人びと聞こゆれど(と女房たちが申し上げるが)、御身の憂きまゝに(宮はこの情けない身の上事情にあつて)、後れきこえじと思せば(御息所に先立たれるくらいなら共に死にたいとお思いになって)、つと添ひたまへり(ぴったり寄り添いなさっていました)。 *「なほ渡らせたまひね」は注にく女房の詞。物の怪が落葉の宮に移らないように。>とある。従って、明示補語する。

[第二段 雲居雁、手紙を奪う]

大将殿は、この昼つ方、*三条殿におはしにける(大将殿は、その日の昼時分には、六条院東殿から自宅に戻って三条邸にいらっしゃったのでして)、*今宵立ち返り参でたまはむに(今夜再び小野山荘に参上なさろうとお思いだが)、 *「さんでうどのにおはしにける」については、注にく連体中止法。間合が生きている。>とある。「間合い」とは、「昼つ方～を、今宵」という語りで、条件ないし状況提示の接続助詞「を」の所で息を吞んで発音しなかった事を言っているのだろうか。実際、当文は此処で句点として、「今宵」からを別行仕立てにしても文意を損なわない、かと思う。だから語りの妙は、むしろ「おはしにける」の「に」にある。この「に」を完了強調の助動詞と取ろうが、状況説明の格助詞と取ろうが、場面舞台を明示する言い方であることに違いなく、後の展開を期待するのは読者の勝手に過ぎない、ようにも見える。 *「今宵立ち返り参でたまはむに」は注にく小野山荘に行くことをさす。昨晚一泊した。今夜も行けば結婚の三日通いとられる。以下「聞き苦しか

るべし」まで、夕霧の心中に即した地の文。そのため敬語「たまふ」がある。>とある。とあるが、実際の内心文括弧は「ことしも」からとなっていて、校訂は分かり易いが、注釈が分かり難い。強いて言えば、この「までたまはむ」での注意点は、「たまはむ」に於ける意志の助動詞「む」の意向を汲むこと、かと思う。

「*ことしもあり顔に(然も新郎顔で参上するのは)、まだきに聞き苦しがるべし(まだ話もついていないのに体裁が悪そうだ)」など*念じたまひて(などと自重なさって)、いとなかなか年ごろの心もとなさよりも(どうも却って年来の他人行儀でいた時の手応えの無さよりも)、千重にもの思ひ重ねて嘆きたまふ(お出掛けになるのを逡巡なさって悩みなさいます)。*「ことしもあり顔に」は下に<参でむは>などが省かれている、のだろう。で、「ことしもあり(事が然も有るような)」の「こと」とは何か。此处まで語られているように、昨晚の対面では情交が無かった、とされているので、「まだきに」は<情交の有無>を言っているようにも見えるが、それはむしろ実情であり、事実としての情交の有無は確かに重大だが、大将にとっての意味の重大さに於いては、皇女が自分を夫として認めるかどうか、つまり<話が着くかどうか>が決定的な核心事なのであり、「聞き苦し」という世評の話題に成るのは<結婚の有無>に違いないので、「こと」は<結婚>と読んで置く。だから、この項にこそ「今夜も行けば結婚の三日通いとられる。」という注説が欲しい。*「念ず」は<我慢する→自重する>。結果、不参言い訳の手紙を夕刻前に差し出した、ということらしい。大将は昼には三条邸に戻っていたとの事だから、二通目は三条邸で書いたようだし、「まだき」は<まだ朝の手紙への返書が来ない>ので、「千重にもの思ひ重ねて」再訪を思い止まった、ということなのかも知れない。

北の方は、かかる御ありきのけしきほの聞きて、心やましと聞きゐたまへるに、知らぬやうにて、君達もて遊び紛らはしつつ、わが昼の御座に臥したまへり(奥方はこうした源君のお忍び歩きの様子をちょっと耳にして、気に入らないと聞いていらっしゃったが、知らん顔をして子供たちと遊んで気を紛らせては、御自分の居間に休んでいらしゃいました)。*この文の分かり易さは不思議なほどで奇妙にさえ感じる。内容が、現代の普通の家庭でも有り得るような事柄に近い、ということもあるのだろう。それだけでも時代の違いと雲上世界の事情を思えば、珍しい事にも思えるが、言い回しも他の文と違って、特に平易に見える。

宵過ぐるほどにぞ(宵も終わろうかという遅い時分になって)、この御返り持て参れるを(この御息所の返書を使者が持って参ったが)、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば(斯くも何時に無く乱れた鶏の足跡のような文字なので)、とみにも見解きたまはで(直ぐには読み取れず)、大殿油近う取り寄せて見たまふ(大将は部屋灯りを手許に近づけてお読みなさいます)。「よひ」は<夜にはいつから、夜中に至るまでの間。(古代では、一日のうち暗い部分を、「よひ」「よなか」「あかつき」の三つに分けた)>と古語辞典にある。「過ぐ」は<終わる>。「宵過ぐるほど」は<夜中前>。実際の時刻は断定し難いが、言い方としては、特使でもない限り通常の文遣いが届けられる最終の相当遅い時分、を言っているのだろう。御息所は夕方に返書を出した。夕方と言っても夕餉の後くらいの説明だったので、6時過ぎの既に<宵の内>だったように思われる。小野山荘を修学院あたりとしても、馬を飛ばしての急使なら1時間くらいで、7~8時には三条邸に届いた、くらいに読んで置こうかと思う。

女君(夫人は)、もの隔てたるやうなれど(衝立で仕切られた隣の間いらしたようだが)、いと疾く見つけたまうて(目敏くこの大将が女からの手紙を読もうとなさっているのを見つけなさって)、はひ寄りて(静かに近付いて)、御後ろより取りたまうつ(後ろからその手紙を取り上げなされたのです)。

「あさましよう(呆れましたね)。こは、いかにしたまふぞ(これは何をなさいます)。あな、けしからず(何とひどい事を)。六条の東の上の御文なり(それは六条の東殿の上様のお手紙ですよ)。今朝、風邪おこりて悩ましげにしたまへるを(今朝風をひいて苦しそうにしていらっしやったのを)、院の御前にはべりて(六条院殿の御前にご挨拶に伺って)、出でつるほど(帰る時に)、まとも参うでずなりぬれば(重ねてはお会い申さずになってしまいましたので)、いとほしさに(気になって)、今の間いかにと(今のお加減はいかがですかと)、聞こえたりつるなり(問い合わせたのです)。

見たまへよ(見て御覧なさい)、懸想びたる*文のさまか(その縦文が恋文の体ですか)。さても(それにしても)、*なほなほしの御さまや(乱暴な)。年月に添へて(長く連れ添うほど)、いたうあなづりたまふこそうれたけれ(ますます私を軽んじなさるというのは心外です)。思はむところを(私が如何思おうが)、むげに恥ぢたまはぬよ(一向に意に介しなさないのですね)」 *「ふみのさま」は、御息所が「おしひねりて出だしたまひて」と一段にあった。「東の上の御文」という言い訳が尤もらしく見える演出。 *「なほなほし」は「直直し」で<平凡だ。品が無い。卑しい。>と古語辞典にあり、如何にも平民らしい粗野な振る舞い、という語感かと思う。

とうちうめきて(と嘆いて見せて)、惜しみ顔にも*ひこしろひたまはねば(ムキになって取り返そうともなさないの)、*さすがに(肩透かしを食ったように自戒の念にも襲われて)、ふとも見で持たまへり(勢いのままに読むことも出来ず手紙を握っていらっしやいました)。 *「ひこしろふ」は<引き合う→取り返そうとする>。 *「さすがに」は注に<奪ってはみたものの、やはり、の意。本当に養母からの手紙であつたらとも思う。はしたなさ嫉妬心むきだしにするのも体裁悪いので。>とある。

「年月に添ふるあなづらはしきは(連れ添うほどにバカにしてるのは)、御心ならひなべかめり(あなたの方でしょうよ)」

とばかり(とだけ)、かくうるはしだちたまへるに憚りて(このように夫の大將が動じないでいらっしやるのに気後れして)、若やかにをかしきさましてのたまへば(子供っぽいふくれっ面をして夫人が仰るので)、うち笑ひて(大將は笑って)、

「そは、ともかくもあらむ(そういう行き違ひは、言い出せばお互い様だろう)。世の常の事なり(長く連れ添った夫婦にはよくあることだ)。*またあらじかし(しかしこういうことは、他にはないんじゃないか。)、 *「またあらじかし」は注に<読点で、下文にかけて読む句。>とある。この「また(他に)」が副詞語用で下文のことを指す事は確かそうだが、同時に上文の「そはあらむ」を受けた「また(一方で)」という接続詞語用にもなっている構文を見なければ全体の文意が通らない。これは発言文で、恐らくは「世の常の事なり」で一息吐いてから「またあらじかし」と以下に続けたもので、その文意では注釈の通りの校訂が正しい、とは思ふ。が、論理構成は「あらむ」に対する「あらじ」という思考を「かし」で主張した、という口語文ならではの独特な言い回しであり、此処で句点を打つ、という校訂も成立すると思う。その上で、言い換えに際しては<しかし是は>を必ず明示しなければならない、のだろう。

*よろしうなりぬる男の(そこそこの地位に就いた男が)、かく紛ふ方なく(このように脇目も振らず)、一つ所を守らへて(一人の妻を守って)、*もの懼ぢしたる鳥の兄鷹やうのものやうなる

は(尻に敷かれているようなのは、)。いかに人笑ふらむ(何と人笑いなことか)。さる*かたくなしき者に守られたまふは(そのような面白味のない小者に守られていらっしやっては)、御ためにもたけからずや(あなたの威勢も上がりますまい)。 *「よろし」は「よし」「よろし」「わろし」「あし」の評価段階で好評ではあるが最上評価よりは劣る語感。こういう言い方は今でもよくあって、曖昧に「まずまず」とか「そこそこ」とか言う。「相当な」や「かなりの」という地位の高さを直接示す言い方は他人を持ち上げる時には使うが、自分を遠回しに言う時には使わない。 *「ものおぢしたるとりのせうやうのものやうなるは」は注に<「兄鷹(せう)」>。雄鷹は雌鷹にびくびくしているという譬えによる。終助詞「は」詠嘆の意。句点で文が切れる。>とある。今で言う<尻に敷かれるさま>を当時は「鳥の兄鷹やう」と言っただろう。また、此处で句点とする校訂は、倒置文として「またあらかし」に結ぶ文意と解す、という意味なのだろうが、また、文意としてはその解釈に異は無いが、語り手の語調としては、此处では一息入れずに、一気に「いかに人笑ふらむ」まで言い継いでから一息吐き、其処までの全体の文意を「さるかたくなしき者」に被せて皮肉る、という言い方に見える。 *「かたくなし」は「頑し」と漢字表記され、原義は<頑固な偏屈者である>ということのようだが、延いては、融通が利かない、世間知らず、愚かで教養がない、という言い方になり、此处では<小者=狭量者>くらの語感。

あまたが中に(多くの女の中で)、なほ際まさり(一段と優位に立ち)、ことなるけぢめ見えたるこそ(正妻の地位を占めてこそ)、よそのおぼえも心にくく(傍目に威厳高く)、わが心地もなほ古りがたく(私も新鮮に感じ)、をかしきこともあはれなるすぢも絶えざらめ(共に風雅に遊び夜伽に睦ぶことも続くことでしょう)。 *此处の大將の言い方は、乱暴に手紙を横取りした妻の嫉妬をたしなめる心算で、仮に手紙が女からのものだったとしても、あなたはどっしりと構えているべきだ、と言っているのだろうが、また、そう言いたい気持ちも分かる気がするが、手紙を取られている此处で其を言うのは藪蛇のような気もして、他人事ながら妙に胸騒ぎする。

かく*翁のなにがし守りけむやうに(そのように私が、中国の昔話にあった過去にとらわれて進歩のない老人のように)、おれ惑ひたれば(愚かしく呆けてしまったなら)、いとぞ口惜しき(よほど詰まらない人生だろうに)。いづこの栄えかあらむ(何の栄誉があるものか) *「おきな」のなにがしまもりけむは注に<走り出た兎が偶然に当たって首を折った切株を再度期待して見守ったという、「韓非子」五蠹篇に見える話。>とある。「韓非(かんぴ)」は大辞泉に< [?~前 233 ころ] 中国、戦国時代末期の思想家。韓の公子。荀子(じゅんし)に師事し、法家の思想を大成した。韓の使者として秦(しん)に赴くが、李斯(りし)の讒言(ざんげん)により投獄され、獄中死する。韓非子。>とある。その思想家が著した書のひとつが「五蠹篇(ごとへん)」というものらしい。ウェブで<「韓非子」五蠹篇>を検索すると「齊太公のサイト」というサイトに「五蠹篇」の抄訳があり、その中に「聖人は古いことならなんでも善いとは考えず、一定不変の善などにも従わない。今日の事情を取り上げて考え、それに応じてそのための対策を立てるのである。」という一説が有り、その例え話に<宋の人で、畑を耕している者がいた。畑のなかに切り株があった。兎が飛び出してきて、切り株にぶつかって首を折って死んだ。彼は苦勞もなく兎を得たことを喜んで、それから鋤を捨て去り、耕作をやめて切り株の側を離れず、また兎が得られるように願った。兎は二度と得られず、宋の国中の笑いものにされた。いま、古代の王者たちの政治の仕方を踏襲して、当今の世を治めようとするのは、すべて切り株の側を離れずにいるのと同じ類である。>と記されている、とのこと。「おきな」は<宋の農民>らしい。

と(と大將は悠然とした態度を通して)、さすがに(上手く取り繕って)、この文の*けしきなく*をこつり取らむの心にて(この手紙が女からのものではない様に見せかけて物欲しそうな素振り無く取り返そうと考えて)、欺き申したまへば(欺き申しなさると)、いと*にほひやかにうち笑ひ

て(夫人はとてものにこやかに笑って)、 *「けしきなく」は<それらしい素振り無しに>だろうが、「それらしい」は<物欲しそうな>であり、「物欲しい」のは<手紙が、宮からではないもの、自分の出した恋文の返事だから>だ。 *「をこつる」は「誘る」と表記があり< [動ラ四] だまして人をさそう。また、機嫌をとる。 >と大辞泉にある。「おちよくる」に近い語感。「をこつり取る」は<騙し取る>というよりは<誤魔化して取り返す>くらいの言い方に見える。 *「にほひやか」は<つやがあって美しいさま。はなやかなさま。 >と古語辞典にあって、「はなやかさ」は藤原姫らしい気もするが、此处で<華やかさを振りまく>のは意味不明で、むしろ大将の言葉の揚げ足取りに遊ぶ<無邪気さ、屈託の無さ>を示す<にこやかな表情>と置いて置く。

「ものの映え映えしき作り出でたまふほど(あなたが生活を華やかになさろうとするほど)、古りぬる人苦しや(年老いた私は窮屈で息苦しくなるんですよ)。いと今めかしくなり変はれる御けしきのすさまじさも(いやに若ぶりなさったあなたの豹変の物凄さも)、見ならばずなりにける事なれば(見慣れない事ですので)、いとなむ苦しき(本当に気持ち悪いったらないわ)。*かねてよりならばしたまはで(以前からの習慣ではいらっしやらず、此处へ来てのことですものね)」 *「かねてよりならばしたまはで」は「見ならばずなりにける事なれば」に倒置で繋がる、とも言えそうだが、下に<にはかならむ>などが省かれている、とも読めそうだ。下文に「にはかと思すばかりには」とあるので、その「にはか」を「見ならばずなりにける事」の言い換えと読むと、文の勢いが衰えるような気がする。

と*かこちたまふも(と夫人が不平を仰るのも)、憎くもあらず(可愛げがあります)。 *「かこつ」は<口実にする。言い訳を言う。 >でもあるが<嘆く。不平を言う。 >でもある。

「にはかと思すばかりには(私が此处に来て急に変わったとお思いになるのは)、何ごとか見ゆらむ(何を御覧になってのことでしょうか)。いとうたてある御心の隈かな(実に心外なお疑いですね)。よからずもの聞こえ知らする人ぞあるべき(よからぬ話をお聞かせ申す女房がいるのでしょう)。あやしう、もとよりまろをば許さぬぞかし(その女房は意固地に私を認めていないのだろう)。なほ(今でもまだ)、かの緑の袖の名残(学生時代の六位の浅葱色の袍を着ていた下級だった時のことを根に持って)、あなづらはしきにことづけて(私を軽んじ易いように言い立てて)、もてなしたてまつらむと思ふやうあるにや(あなたの肩を持って取り入ろうと考えているに違いない)。いろいろ聞きにくきことどもほのめくめり(いろいろと聞き苦しい悪い噂も仄めかすのだろう)。あいなき人の御ためにも(その噂で濡れ衣を着せられた相手の方にとっても)、いとほしう(ご迷惑な)」

などのたまへど(などと仰るが)、つひにあるべきことと思せば(その噂も結局は本当のことになると大将はお思いなので)、ことに*あらがはず(特に否定はしない)。大輔の乳母(たいふのめのと、大将の六位時代に下級と蔑んだ奥方付きの大輔の乳母は)、いと苦しと聞きて(大将こそが未だにあの時の事を根に持っていらっしやると、この大将の話をととても気まずく聞いて)、ものも聞こえず(何も言えません)。 *「あらがふ」は<争う。言い合う。否定する。 >と古語辞典にある。ただ、主語は大将だろうに敬語遣いが無く、妙に気になる。

[第三段 手紙を見ぬまま朝になる]

とかく言ひしろひて(あれこれ言い合って)、この御文はひき隠したまひつれば(夫人はこのお手紙を自分の方へ隠してしまいなさったので)、せめても漁り取らで(大将は無闇に探し出さず)、つれなく大殿籠もりぬれば(素っ気無くお床にお着きになったものの)、胸はしりて(気は急いで)、「いかで取りてしがな(何とか取り返さない)」と、「御息所の御文なめり(御息所のお手紙のようだった)。何ごとありつらむ(何があったのだろうか)」と、目も合はず思ひ臥したまへり(とても寝付けずに考えて横になっていらっしやいました)。

女君の寝たまへるに(夫人が寝ていらっしやる間に)、昨夜の御座の下などに(昨夜の夫人がいらした御座所の下などを)、さりげなくて探りたまへど、なし(それとなく探しなさったが、ありません)。隠したまへらむほどもなければ(特に隠し込もうとなさるほどでもなかったのに)、いと心やましくて(見つからないのが、とても気に病まれて)、明けぬれど(夜が明けたが)、とみにも起きたまはず(直ぐにはお起きになりません)。

女君は、君達におどろかされて(夫人が子供たちに起こされて)、ゐざり出でたまふにぞ(這い出ていらっしやった時に)、われも今起きたまふやうにて(自分も今起きたように)、よろづにうかがひたまへど(大将はその慌しさに紛れて、あちこち探しなさったが)、え見つけたまはず(見つけ出す事が出来ませんでした)。

女は(妻は)、かく求めむとも思ひたまへらぬをぞ(夫が然程に必要な思っいらっしやらなさそうなのを)、「げに、懸想なき御文なりけり(本当に恋文ではないようだ)」と、心にも入れねば(と気にも掛けずに)、君達のあわて遊びあひて(子供たちが忙しくなく遊び合って)、雛作り、拾ひ据ゑて遊びたまふ(人形を作って並び立てて遊んでいらっしやったり)、書読み(ふみよみ、本を読んで)、手習ひなど(習字したり)、さまざまにいとあわたたし(様々に雑然と)、小さき稚児這ひかかり引きしろへば(小さな子が這い寄って来て服を引っ張るので)、取りし文のことも思ひ出でたまはず(取り上げた手紙のことも思い出ささいません)。

男は、異事もおぼえたまはず(夫は他のことなど考えられず)、かしこに疾く聞こえむと思すに(あちらに早くお返事を出し申そうとお思いなのに)、昨夜の御文のさまも(昨夜のお手紙の文面も)、えたしかに見ずなりにしかば(しっかり読んでいなかったのも、それに対するお返事をお書き申さねば)、「見ぬさまならむも(読んでいないような返事になって)、散らしてけると押し量りたまふべし(粗末に扱って紛失したのだろうかとお考えなさるだろう)」など、思ひ乱れたまふ(などと思ひ乱れなさいます)。

誰れも誰れも御台参りなどして(当人たちも子供たちも食事など召し上がって)、のどかになりぬる昼つ方(一息吐いた昼過ぎに)、思ひわづらひて(大将は思いあぐねて)、

「昨夜の御文は、何ごとかありし(昨夜のお手紙は何と書いてありましたか)。あやしう見せたまはで(あなたが変な真似をしてお見せ下さらなかったのも)。今日も訪らひ聞こゆべし(今日も養母に御見舞申し上げようと思ひますが)。悩ましうて(気分が優れず)、六条にもえ参るまじけ

れば(六条院にも参上できませんので)、文をこそはたてまつらめ(御手紙を差し上げなければなりません)。何ごとかありけむ(何と書いてあったものか)」

とのたまふが(と仰るのが)、いとさりげなければ(本当にさり気ないので)、「文は、をこがましう取りてけり(手紙は浅はかに取ってしまった)」とすさまじうて(と夫人は気まずくて)、そのことをばかけたまはず(そのことにはお応えなさらず)、

「*一夜の深山風に(先だつての夜更かしの山風に)、あやまりたまへる悩ましきななりと(当たり前なさつて体調を崩しましたと)、をかしきやうにかこちきこえたまへかし(風流めかしてお返事申しなさいましよ)」 *「ひとよのみやまかせに」は注に<以下「聞こえたまへかし」まで、雲居雁の詞。「御山風」は小野山荘訪問を喩える。皮肉を込める。>とある。

と聞こえたまふ(と申しなさいます)。

「いで、このひがこと(またそんな皮肉を)、な常にのたまひそ(いつまでも仰いますな)。何のをかしきやうかある(何が風流なもんですか)。世人になずらへたまふこそ(私を普通の遊び人のように仰るのは)、なかなか恥づかしけれ(何とも気恥ずかしい)。この女房たちも(此処にいる女房たちも)、かつはあやしきまめざまを(この先ずは変なほどの堅物を)、かくのたまふと(そんな風に言うなんてと)、ほほ笑むらむものを(笑っているだろうに)」

と、戯れ言に言ひなして(と大将は冗談めかして言い繕つて)、

「その文よ。いつら(手紙は何処ですか)」

とのたまへど(と仰るが)、とみにも引き出でたまはぬほどに(夫人は直ぐには取り出しなさらずに)、なほ物語など聞こえて(別の話など始めて)、しばし臥したまへるほどに(大将は少し横になっていらっしゃる内に)、暮れにけり(日が暮れました)。

[第四段 夕霧、手紙を見る]

ひぐらしの声におどろきて(ヒグラシの鳴き声に目が覚めて)、「*山の蔭いかに*霧りふたがりぬらむ(山間の早い夕暮れに、小野山荘はどんなにか霧に塞がれて見通しが利かず、ご心痛なことだろう)。あさましや(何という私の至らなさか)。今日この御返事をだに(今日このお返事を出さなくては)」と、いとほしうて(と大将は申し訳ない思いで)、ただ知らず顔に硯おしすりて(ただそんな表情は見せずに淡々と硯に墨を磨つて)、「いかになしてしにかとりなさむ(如何書いたものか)」と、眺めおはする(と辺りを眺めて文面を思案なさいます)。 *「やまのかげ」は注に<小野山荘をさす。>とある。また、「暮れにけり。ひぐらしの声におどろきて、山の蔭いかに霧りふたがりぬらむ。」という此処の語り口は<『源氏物語引歌』は「ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞありける」(古今集秋上、二〇四、読人しらず)を指摘。>と参照歌指摘があり、如何にも指摘引歌を下敷きにした話運びだ。ところでこの引歌は、一昨日の山荘で大将が俄かに宮に言い寄る場面に先立って、一章四段に「日入り方になり行くに、空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗き心地するに、ひぐらしの鳴ききりて、垣ほに生ふる撫子の、うちなびける色もをかしう見ゆ。」と、話の展開を予感させるべく描かれた山荘風情の背景描写にも下敷かれ

ていた。即ち、ヒグラシの声に言い寄った日の山荘の風情を思い出し、その後の山荘の状態、特に宮の様子が改めて気懸かりになる、という大将の心象描写を作者は示している。ただ、「山の蔭」という語自体が示しているのはく山間の早い夕暮れだ。 *「霧りふたがりぬらむ」は注に<『完訳』は「涙に濡れて思い屈する意」と注す。>とある。一章四段の「空のけしきもあはれに霧りわたりて」に対して、閉塞感を表わした言い方なのだろう。

御座の奥のすこし上がりたる所を(すると大将は御自分の座所の隅の敷物が少し盛り上がっている所が気になって)、試みにひき上げたまへれば(めくって調べてみなさると)、「これにさし挟みたまへるなりけり(此処に差し挟んでいらっしゃったのか)」と(と御手紙を見つけて)、うれしうもをこがましうもおぼゆるに(嬉しくもバカバカしくも思えて)、うち笑みて見たまふに(にっこりしてお読みになると)、かう心苦しきことなむありける(御息所のお手紙は昨夜の不参を嘆くという斯くも心苦しい文面だったのです)。胸つぶれて(大将は自責の念に胸が押し潰されて)、「一夜のことを(一昨夜のことを)、心ありて聞きたまうける(御息所は正式の求婚と違っていらっしゃる)」と思すに(とお思いになると)、いとほしう心苦し(不参の無礼が申し訳なく取り返しがつきません)。

「昨夜だに(正式の求婚とすれば三日通いを怠ってしまったことになる、昨夜でさえ)、いかに思ひ明かしたまうけむ(どんな情けない思いで夜を明かしなされたことか)。今日も、今まで文をだに(今日も今まで手紙すら出さずにいて)」

と、言はむ方なくおぼゆ(と大将は言葉も無い思いでいらっしゃいます)。いと苦しげに(とても苦しうに)、言ふかひなく(見通しも無く)、書き紛らはしたまへるさまにて(言い訳を書いていらっしゃるありさまで)、

「*おぼろけに思ひあまりてやは(御息所はよくよく思い余って)、かく書きたまうつらむ(こうお書きなされたのだろうに)。つれなくて今宵の明けつらむ(返事も無しに今朝となってしまったとは)」 *「おぼろけに」は<普通に>だが、多くは下に打消す形で語用されるらしく、下に打消しが無い場合は「おぼろけに」で<「おぼろけならずに」=普通ではなしに>の意味になるらしい。

と、言ふべき方のなければ(と取り返しの付かない事をしてしまったので)、女君ぞ(昨夜の妻の手紙の取り上げが)、いとつらう心憂き(実に辛く残念です)。

「すずろに(思い付きで)、かく、あだへ隠して(あのようにふざけて隠して)。いでや(しかしそれも)、わがならはしぞや(自分のしつけが悪いのか)」と(と大将は)、さまざまに身もつらく(それもこれも立場が無く)、すべて泣きぬべき心地したまふ(全て情けなく泣き出した気分になりなさいます)。

やがて出で立ちたまはむとするを(そのまま小野山荘にお出掛けなさろうという気になるが)、

「心やすく対面もあらざらむものから(宮が心安く対面に応じそうもない態度なので)、人もかくのたまふ(御息所が代返なさったのだろう)、いかならむ(どうしたものか)。*坎日にもありけるを(今日は縁起の悪い日読みなので)、もしたまさかに思ひ許したまはば(もし偶々宮が私の求婚を受諾なさったとしたら)、悪しからむ(悪縁になってしまう)。なほ吉からむことをこそ(やは

り吉日を選んで出向くべきだ)」 *「坎日(かんにち)」は<曆で、万事に凶とされる日。外出などの行事を見合わせる。>と大辞林にある。ただ文意からすると、外出で事故に遭う、というよりは、「凶日(きょうじつ)」の<物事をするのに縁起の悪い日。不吉な日。>と同意だ。

と、*うるはしき心に思して(と几帳面にお考えになって)、まづ、この御返りを聞こえたまふ(先ずはこの御返書を送り申し上げなさいます)。 *「うるはし」は<端麗、端正>で、注には<『完訳』は「几帳面な心に。語り手の皮肉」と注す。>とある。

「いとめづらしき御文を(これは珍しく御息所からの御手紙を頂きまして)、かたがたうれしう見たまふるに(久方ぶりと同時にご壮健かと嬉しく拝見申しましたが)、*この御答めをなむ(私の不参をお答めなさるといふ文面でして)。いかに聞こし召したることにか(何を如何お聞きなさつてのことでしょうか)。 *「この御答めをなむ」は注に<句点で文が切れる。係助詞「なむ」の下に「いかにせむ」などの語句が省略された形。『集成』は「このお叱りは何としたことなのでしょう」。『完訳』は「このお答めをどうお受けしたらよいのでしょうか」と訳す。>とある。基本的には従いたい、この「を」を「私への」と取れば、「なむ」には感嘆の度合いが強く、より強い語調の否定も想起され、下の省句は「いと憂ければ、いかにせむ」くらいにも思える。

秋の野の草の茂みは分けしかど、仮寝の枕結びやはせし (和歌 39-10)

手に取ったのは確かでも、静かに置いた野辺の花 (意識 39-10)

*この歌は、御息所の「女郎花萎るる野辺をいづこと一夜ばかりの宿を借りけむ(和歌 39-09)に対する返歌になっていなければならないので、「女郎花萎るる野辺」に対して「秋の野の草の茂み」、「宿を借りけむ」に対して「仮寝の枕」と言い返している。が、歌趣は御息所が詠んだ「をみなへし」の風情とは違って、「分けしかど(踏み入って訪れはしたが)」「結びやはせし(情交には至っていない)」という理屈というか言い訳に終始していて、注にある<「草」「枕」「結び」が縁語。>という指摘も、情ではなく技の工夫なので、歌の味わいは無い。ただ、詠み手の心情が知れるということでは、大将の余裕の無さだけは分かる。が、世を知る御息所の通念からすれば、「分けしかど」なら責任を取って「堅結びせし」でなければならず、「結びやはせし」では如何にも情実が無い、冷淡な印象は拭えない。

明らめきこえさするもあやなけれど(言い訳を申し上げるのも筋違いだが)、昨夜の罪は(昨夜不参しました私の過ちは)、*ひたやごもりにや(宮のお拒みで止む無く致したもので、決して身勝手な不外出ではありません)」 *「ひたやごもり」は「直屋隠り」と表記があり< [名・形動ナリ] ひたすら家の中に閉じこもること。また、そのさま。>と大辞泉にある。で、此処の言い方は「ひたやごもりにや」と反語の「にや」が付いているので<無闇に家に籠もっていたのではありません>ということだろうが、その「無闇に(何も理由がないのに)」という抗弁は、宮が後朝の使いに返事が無かった事、を理由立てる反論を意味していて、詰まりは、大将が独り身勝手に不参を決めたのではなくて、宮に拒まれて仕方なく参上できなかった、と言い訳していることになる、ようだ。不思議なほど分かり難い言い回しだ。

とあり(と御息所へのお返事はありました)。宮には(宮へのお手紙には)、いと多く聞こえたまで(とても多く言葉をお書きになって)、御厩に(みまやに、厩舎にいる)足疾き御馬に(あしときおんむまに、足の速い馬に)*移し置きて(鞍を移し置いて)、*一夜の大夫をぞたてまつれたまふ(事情を知る一昨夜の三等官を使者に立て遣わし申しなさいます)。 *「移し置きて」は注に<『集成』

は「移鞍（うつしぐら）という。移馬（うつしうま、官吏の公用の乗馬用として左右の馬寮に飼われている馬）に置く一定の型式の鞍。駿足の馬に公用の鞍を用いさせたというのは、使命の重さを印象づける」と注す。>とある。源君の近衛大将たる重役振りを示す描写、だろうか。実際、大将はとんでもない重役ではある。*「ひとよのたいふ」とは一章四段に「人を召せば、御司の将監（おんつかさのぞう）よりかうぶり得たる、睦ましき人ぞ参れる」とあった五位の殿上蔵人なのだろう。

「昨夜より、六条の院にさぶらひて（昨夜から六条院に御用で詰めていて）、ただ今なむまかですつと言へ（たった今帰ったところだ）」

とて、言ふべきやう（と言うべき口上を）、ささめき教へたまふ（大将は使者に小声で教えなさいます）。

[第五段 御息所の嘆き]

かしこには（御息所に於かれては）、昨夜もつれなく見えたまひし御けしきを（昨夜も不参であるかの連れなくお見えなされた大将のなさり様を）、忍びあへで（耐え切れずに）、*後の聞こえをもつつみあへず恨みきこえたまうしを（後々の世評で不利になりかねないのも憚らず再訪を願い申しなされたものを）、その御返りだに見えず（そのお返事すら無く）、今日の暮れ果てぬるを（今日もまた暮れ果ててしまうのを）、いかばかりの*御心にかはと（大将はどういうお心算なのかと）、もて離れてあさましう（知らせの無さに呆れ）、心もくだけで（心も折れて）、よろしかりつる御心地（持ち直した御容態も）、またいといたう悩みたまふ（またひどく悪化なさいます）。*「後の聞こえをもつつみあへず」は注に<後々の評判とは、御息所のほうから手紙を贈って宮の結婚を許した、ということをさす。>とある。*「みこころ」は<夕霧の心を推測したもの。>と注にある。

なかなか正身の御心のうちは（ところが宮御本人の御内心では）、このふしをことに憂しとも思し、驚くべきことしなければ（大将の不参や不文を心外にお思いになって浅ましく恨みなさることもないので）、ただおぼえぬ人に（単に意中でもない男と）、うちとけたりしありさまを見えしことばかりこそ口惜しけれ（気を許した形で会ってしまったことだけを後悔して）、いとしも思ししまぬを（然程にもお思い込みなさらないのを）、かくいみじうおぼいたるを（母御息所が斯くも深刻にお考えなのが）、あさましう恥づかしう（自分の至らなさや恥づかしさ思えて）、明らめきこえたまふ方なくて（言い訳のしようもなく）、例よりももの恥ぢしたまへるけしき見えたまふを（いつにまして小さくなっていらっしゃる姿が見えなさるのを）、「いと心苦しう（本当に不憫だわ）、ものをのみ思ほし添ふべかりける（私の心配ばかりしなさって）」と見たてまつるも（と娘を押し申し上げるにも）、胸つとふたがりて悲しければ（御息所は胸が一杯になって悲しく）、

「今さらにむつかしきことをば聞こえじと思へど（今さらお小言らしいことは申さないで置こうと思いますが）、なほ（今一度申せば）、御宿世とはいひながら（大将殿と御縁があるとは言うものの）、思はずに心幼くて（不用意にも思慮浅く男を近づけて）、*人のもどきを負ひたまふべきことを（他人の非難を負いかねなさない事を、なされました）。取り返すべきことにはあらねど（それは事実として、取り返しの付くことではありませんが）、今よりは、なほさる心したまへ（今後は男によほど用心なされませ）。*「人のもどきを負ひたまふべきことを」について、注には<『集成』は「を」

格助詞、目的格の意に解し、読点で文を下に続ける。『完訳』は「を」間投助詞、詠嘆の意に解し、句点で文を結ぶ。>とある。「思はずに心幼くて」は全般的なく脇の甘さ>を言っているようにも見え、「取り返すべきことにはあらねど」も全般的なく過去の過ち>と読めそうだが、宮に対する言い方としては、具体的に<大将を近づけてしまったこと>を指し示したほうが説得力があるように思える。なので、御息所は宮の<脇の甘い性格>を注意するにしても、この際、にこだわって諫めた、と読んで、与謝野訳文に倣って「を」の下に<しなせたまひぬ>くらいが省かれた言い方と考えてみたい。それが母親らしい言い方のような気がする。

数ならぬ身ながらも(私は下級の家柄出身の身ながら)、よろづに育みきこえつるを(いろいろとお世話申してきましたが)、今は何事をも思し知り(今は何でもお分かりで)、世の中のとざまかうざまのありさまをも(男女の仲のあれこれも)、思したどりぬべきほどに(深い意味が分かるほどで)、見たてまつりおきつることと(いらっしゃることと)、そなたさまはうしろやすくこそ見たてまつりつれ(そのへんのことは安心して思い申し上げておりましたが)、なほいといはけて(まだとても未熟で)、強き御心おきてのなかりけることと(しっかりした御心構えでなかったことと)、思ひ乱れはべるに(心配になりまして)、今しばしの命も*とどめまほしうなむ(今しばし生き永らえて見届けたく、存じます)。 *「とどめまほしうなむ」は注に<係助詞「なむ」の下に「思ひはべる」などの語句が省略。>とある。

ただ人だに(臣下身分の者でも)、すこしよろしくなりぬる女の(良家の女が)、人二人と見るためしは(二人の男と結婚する例は)、心憂くあはつけきわざなるを(情けなく軽薄なことですのに)、ましてかかる御身には(まして宮様のご身分では)、さばかりおぼろけにて(あのようないい加減な、礼儀を失した形で)、人の近づききこゆべきにもあらぬを(男が近付き申して良い筈もないものを)、*思ひのほか心にもつかぬ御ありさまと(それでなくても、思いの他に心外な御結婚と)、年ごろも見たてまつり悩みしかど(前夫との御縁を長年思い申し悩んでいたというのに)、さるべき御宿世にこそは(宮がこれほどに薄幸な御運勢とは)。 *「思ひのほか心にもつかぬ御ありさまと」は注に<御息所は落葉宮の柏木との結婚を不本意なこととと思っていた。>とある。「御ありさまと年ごろも見たてまつり」という言い方は<宮の藤君との御結婚を長年と思い申し上げて>で、その「御結婚」を御息所が「思ひのほか心にもつかぬ」と「悩みし」だったので、「さるべき御宿世にこそは」と嘆息した、と読む。主題は「人二人と見るためし」なので<それでなくても>と<前夫との縁>を明示補語する。

院より始めたてまつりて(朱雀院がお初めに)、思しなびき(御賛意なさり)、この父大臣にも許いたまふべき御けしきありしに(前夫の父大臣である藤原殿にもこのご結婚をお認めなざる御意向だったので)、おのれ一人しも心をたてても(私一人が反対しても)、いかがはと思ひ寄りはべりしことなれば(どうにもならないと同意申した御結婚だったので)、*末の世までものしき御ありさまを(未亡人となった御不幸は)、*わが御過ちならぬに(宮の御罪ではないと)、大空をかこちて見たてまつり過ぐすを(天を仰ぎ嘆いてお世話申して過ぎて来ましたが)、 *「すゑのよまでものし」は<宮の晩年まで憂う>ではなく<藤君が死してなお災いす>という悪口だろう。我が子可愛さに、己が雑言に気付かない御息所の浅ましき、だろうか。「ものし」は憎しみのある語感で、きつい印象だ。 *「わが御過ちならぬ」の「御」は宮への敬称、らしい。

いとかう人のためわがための(実にこのような大将殿にとっても宮にとっても)、よろづに聞きにくかりぬべきことの出で来*添ひぬべきが(何かと聞き苦しくなるような軽薄な噂が立ちそう

な事が加わるとは。)、さても(それでも)、*よその御名をば知らぬ顔にて(藤原氏の嫁など気にせずに)、*世の常の御ありさまにだにあらば(正妻の座に就けるなら)、おのづからあり経むにつけても(成り行きに任せても)、慰むこともやと(安心できるかと)、思ひなしはべるを(思ってもみませんが)、こよなう情けなき人の御心にもはべりけるかな(本当に頼りない大将殿のお考えでございますものねえ)」 *「添ひぬべきが」は言い差しの感嘆表現で、下に<いかにせむ(困った事だ)>などが省かれている文末、かと思う。でないと、「大空をかこちて見たてまつり過ぐすを」を受ける叙述が無い構文になってしまう。 *「よそのおんな」は<他の女>の洒落ではないだろうが、「御名」の「御」は<藤原氏への敬称>だろう。大将殿の奥方の<藤原姫>は御息所の懸念の核心だ。 *「世の常の御ありさま」は<正妻の御座>。

と、つぶつぶと泣きたまふ(と大粒涙で泣きなさいます)。

[第六段 御息所死去す]

いとわりなくおしこめてのたまふを(大将殿との結婚を御息所がもう無闇に決め付けて仰るのに)、あらがひはるけむ言の葉もなく(反論を言い張ろうという一言も無しに)、ただうち泣きたまへるさま(ただ泣いていらっしゃる宮の姿は)、おほどかにらうたげなり(おっとりとして可愛らしい)。うちまもりつつ(その宮をじっと見つめながら)、

「あはれ(可哀相に)、何ごとかは、人に劣りたまへる(何処が人に劣っていらっしゃるものか)。いかなる御宿世にて(宮は何の因果で)、やすからず(穏やかならず)、ものを深く思すべき契り深かりけむ(深く悩みなされなければならない事情の相手と御縁が深いのでしょうか)」

などのたまふままに(などと仰ると)、いみじう苦しうしたまふ(御息所は急に苦しみなさいます)。もののけなども、かかる弱目に所得るものなりければ(物の怪などもこのような弱り目に祟るものなれば)、にはかに消え入りて(御息所は忽ち生氣も失せて)、ただ冷えに冷え入りたまふ(体は冷たくなって行きなさいます)。

律師も騒ぎたちたまうて(律師も大声を上げなきて)、*願など立てののしりたまふ(蘇生の願文を唱え挙げなさいます)。*深き誓ひにて(心に深く誓いを立てて)、今は命を限りける山籠もりを(後は死ぬまでと決心した山籠もりを)、かくまでおぼろけならず出で立ちて(懇意の御息所の延命のためならと斯くも曲げに曲げて叡山から出て来て)、*壇こぼちて帰り入らむことの(法力が通じず護摩壇を壊して帰山する事が)、面目なく(情けなく)、仏もつらくおぼえたまふべきことを(仏も恨めしく思えなきて)、心を起こして祈り申したまふ(最期の一懇と祈願申しなさいます)。宮の泣き惑ひたまふこと、いとことわりなりかし(宮の泣き惑ひなきてのも実に無理はないところだ)。 *「ぐわん」は注に<蘇生の願文。>とある。 *「深き誓ひにて」は注に<以下「仏もつらくおぼえたまふべきこと」まで、願文の趣旨。>とある。 *「壇こぼちて帰り入らむ」は注に<「壇壊つ」は、修法の護摩壇。加持の僧侶は効験がないと判断すると護摩壇を壊して帰山する。>とある。

かく騒ぐほどに(この騒ぎの中に)、大将殿より御文取り入れたる(大将殿からお手紙が届きましたとの知らせを)、*ほのかに聞きたまひて(微かにお聞きになって)、今宵もおはすまじきなめり(今夜もいらっしゃらないようだ)、とうち聞きたまふ(と御息所はお思いになります)。 *「ほのかに聞きたまひて」は注に<主語は御息所。『完訳』は「御息所は少し意識を回復する」と注す。>とある。確か

に、「にはかに消え入りて、ただ冷えに冷え入りたまふ」は絶命の描写にも見えた。ただ、昏睡に陥った後に、一時意識を取り戻す、という事例は多くあるようにもよく耳にする。

「心憂く(無念な)。世のためしにも引かれたまふべきなめり(惨めな皇女の例に引かれなさり予ねない)。何に我さへさる言の葉を残しけむ(どうして私までそのような再訪を乞うような手紙を書いてしまったのか)」

と、さまざま思し出づるに、やがて絶え入りたまひぬ(とさまざま思い出されなさるままに息を引き取りなさいました)。あへなくいみじと言へばおろかなり(心残りの多くして、あっけない最後と言うには惜し過ぎます)。昔より、もののけには時々患ひたまふ(御息所は昔から物の怪には時々患いなさっていて)、限りと見ゆる折々もあれば(これまでかと思えることも度々あったので)、「例のごと取り入れたるなめり(また霊が取り付いたのだらう)」とて、加持参り騒げど(とすることで今度も加持祈祷して盛んに除霊したが)、今はのさま(今度こそが最期とは)、しるかりけり(誰の目にも明らかだったのです)。

宮は、後れじと思し入りて、つと添ひ臥したまへり(宮は自分も死に遅れまいと悲しまれて御息所にびったりと寄り添っていらっしやいました)。人びと参りて(女房どもが近付き申して)、

「今は、いふかひなし(仕方ありません)。いとかう思すとも(いくら泣いても)、限りある道は、帰りおはすべきことにもあらず(寿命は引き戻しなされるものではありません)。慕ひきこえたまふとも(会いたいと申されても)、いかでか御心にはかなふべき(最後のお別れでございます)」

と、さらなることわりを聞こえて(と重ねて道理を申し上げて)、

「いとゆゆしう(作法がございます)。亡き御ためにも(御亡骸を清めねば)、罪深きわざなり(罪業に障ります)。今は去らせたまへ(少しお離れ下さい)」

と(と言って)、引き動かいたてまつれど(宮を引き動かし申し上げるが)、すくみたるやうにて(宮は動揺して体が動かず)、ものもおぼえたまはず(思うようになりません)。

修法の壇こぼちて(祈祷の護摩壇を壊して)、ほろほろと出づるに(僧たちが一人づつ帰って行って)、*さるべき限り、片へこそ立ちとまれ(代表者が一部だけ残っているが)、今は限りのさま(事が終わって引けて行く光景は)、いと悲しう心細し(とても悲しく心細い)。 *「さるべき限り」は注にく『集成』は「しかるべき僧たちだけ。近親者とともに三十日の忌に籠る僧たちであろう」、完訳「葬儀を行うべき人々だけ。三十日の忌に籠る僧たちか」と注す。係助詞「こそ」--「とまれ」係結び、逆接用法。>とある。「三十日」は私には分かり難いので明示補語は省く。

[第七段 朱雀院の弔問の手紙]

所々の御弔ひ(方々からの御弔問があり)、いつの間にかと見ゆ(いつの間に知れたのかと思えます)。大将殿も、限りなく聞き驚きたまうて、まづ聞こえたまへり(大将殿も非常に聞き驚きなさって先ずは弔意の使者を遣わしなさいます)。六条の院よりも(六条院源氏殿からも)、致仕の

大殿よりも(ちじのおほとのも、致仕の大臣藤原殿からも)、すべていとしげう聞こえたまふ(全ての高官がそれは絶え間なく弔問なさいます)。

山の帝も聞こし召して(入山なされた朱雀院も御息所の御不幸をお聞き召されて)、いとあはれに御文書いたまへり(とても情愛深く御手紙をお書きなさいました)。宮は、この御消息にぞ、御ぐしもたげたまふ(宮はこの父の御弔文の知らせにだけは御顔を上げなさいます)。

「日ごろ重く悩みたまふと聞きわたりつれど(長らく重い病状と聞き続けてきましたが)、例も篤しうのみ聞きはべりつるならひに(いつも病気がちと聞いていたことに慣れて)、うちたゆみてなむ(油断していました)。かひなきことをばさるものにて(上が亡くなったことは当然だが)、思ひ嘆いたまふらむありさま推し量るなむ(あなたが母の死を嘆いて悲しんでいらっしゃることを思うと)、あはれに心苦しき(胸が一杯になります)。なべての世のことわりに思し慰めたまへ(寿命は誰も逃れられない天の定めと置いて心を鎮めなさい)」

とあり(と父院の手紙にはありました)。目も見えたまはねど(涙で字も見えなさらぬが)、御返り聞こえたまふ(宮はお返事をお書きなさいます)。

常にさこそあらめとのたまひけることとて(常日頃から御息所ご本人がそうして欲しいと仰っていた事ということで)、今日やがて*をさめたてまつるとて(今日の内に別儀を設けずそのまま火葬申し上げることとなって)、*御甥の大和守にてありけるぞ(故人の甥の大和守である者が)、よろづに扱ひきこえける(万事取仕切り申します)。*「をさむ」は<葬る>。注には<『完訳』は「当時は蘇生を期待して葬儀を延ばすのが普通」と注す。当時の葬儀(火葬)は夜に行われた。>とある。*「おんをひのやまとのかみ」は注に<御息所の甥の大和守。『完訳』は「大和守(従五位上)が親類縁者の代表だけに、家柄の低い一族と知れる」と注す。>とある。

骸をだに(からをだに、蘇生適わぬも亡骸だけは)しばし見たてまつらむとて(もう少し拝していたいと)、宮は惜しみきこえたまひけれど(宮は別れを惜しみ申しなさったが)、さてもかひあるべきならねば(それも切りがないので)、皆いそぎたちて(皆葬儀の準備に取り掛かって)、ゆゆしげなるほどにぞ(式場が整う頃に)、大将おはしたる(大将がお着きなさいました)。

「今日より後(今日より後の日では)、日ついで悪しかりけり(日柄が悪いようだ)」

など、人聞きにはのたまひて(などと言ひ訳を仰って)、いとも悲しうあはれに、宮の思し嘆くらむことを推し量りきこえたまうて(さぞ悲しみ深く宮がお嘆きであろうと推し量り申しなさって)、

「かくしも急ぎわたりたまふべきことならず(故大納言殿の義母上の御不幸なれば、こんな急にお出掛けなさる事はありません)」

と、人びといさめきこゆれど(と女房たちがお止め申したが)、しひておはしましぬ(大将殿は強いてお越しなされたのです)。

[第八段 夕霧の弔問]

ほどさへ遠くて(逸る気持に山荘への道程まで遠く感じられ)、入りたまふほど(邸内にお入りになる時は)、いと心すごし(大将はとても宮処離れした寂しさを覚えました)。ゆゆしげに引き隔てめぐらしたる儀式の方は隠して(宮家では忌中幕を張り巡らせて葬儀会場の方は隠して)、この西面に入れたてまつる(宮の居間側の西廂に大将をご案内申し上げます)。大和守出で来て、泣く泣くかしこまりきこゆ(総代の大和守が出て来て泣きながらご挨拶申し上げます)。

妻戸の簀子におし掛かりたまうて(大将は妻戸の前の簀子の高欄に寄り掛かりなさって)、女房呼び出でさせたまふに(宮にお話し申し上げたく、宮付きの女房を呼び出させなさいますが)、ある限り、心も収まらず、物おぼえぬほどなり(誰も動転して大将を御迎え申すことまで気が回りません)。かく渡りたまへるにぞ、いささか慰めて(この大将のお越しに、先々の頼りなさが少し安堵出来て)、少将の君は参る(少将の君が参りました)。

物もえのたまひやらず(大将は掛けなさる言葉もありません)。涙もろにおはせぬ心強さなれど(涙もろくはいらっしゃらない理性派だが)、*所のさま(山荘での葬儀という物寂しさや)、人のけはひなどを思しやるも(宮が泣いていらっしゃるらしい様子などをお思いなさると)、いみじうて(身に詰まされて)、常なき世のありさまの(無常そのものの死が)、人の上ならぬも(他人事ではなく思えて)、いと悲しきなりけり(ひどく感傷的になりました)。 *「所のさま、人のけはひ」は注にく『完訳』は「小野という場所柄、宮の悲嘆する様子などを。狭い山荘で、隣室の様子も感取。「けはひ」に注意」と注す。>とある。「けはひ」に「御」の敬称が無いが、この「人」は<宮>なのだろう。御簾内のことで不確かな事柄ということでもあるだろうが、「けはひ」が外形上の描写ではなく、内心での思考文である場合には「御」が付かない、ということは他にもあった気がする。

ややためらひて(少し貯めなさってから)、「よろしうおこたりたまふさまに承りしかば(いくらか御加減がよろしいように承っておりましたので)、思うたまへたゆみたりしほどに(安堵しておりましたが)。夢も覚むるほどはべなるを(夢も覚めるほどの急な話で)、いとあさましうなむ(本当に驚きました)」と*聞こえたまへり(と大将は宮に申しなさいます)。 *「聞こえたまへり」は大将が宮に<申しなされた>。直接話す相手は少将の君だが、「聞こえ」は謙譲語で宮への言葉を少将の君に取り次がせた、ということだ。こういう事情を謙譲や尊敬の語用で済ませるのが女房語りらしい。

「*思したりしさま(母上がお悩みだったのは)、これに多くは御心も乱れにしぞかし(この者に多くは御心を苦しめられたのだ)」と思すに(とお思いになって)、*さるべきとは言ひながらも(弔問挨拶には答えるのが当然とは言いながらも)、いとつらき人の*御契りなれば(とても辛い大将との御因縁なので)、いらへをだにしたまはず(宮はお応えすらなさいません)。 *「思したりしさま」は注にく以下「乱れにしぞかし」まで、落葉宮の心中。「思したりし」の主語は御息所。>とある。大将を「これ」と言う。 *「さるべし」の「さる」は<弔問挨拶に答えること>なのだろう。 *「御契り」の「御」は語り手が大将に言う敬称なのだろう。「ちぎり」は分かり難い。これまでの経緯だけではなさそうだし、今は先の事を考える場面でもないだろうし、取り敢えず、此処に至る故大納言から続く<御縁>くらいに思って置く。

「いかに聞こえさせたまふとか(宮様が大将殿にどうお応え申しなさるべきか)、聞こえはべるべき(私たちが宮様に申し上げるべきでしょうか)」

「いと軽らかならぬ御さまにて(大将殿というとても重い御地位で)、かくふりはへ急ぎ渡らせたまへる御心ばへを(このようにわざわざ御自らお越しあそばした御厚意を)、思し分かぬやうならむも(お分かりにならないようなのも)、あまりにはべりぬべし(あまりにご無礼です)」

と、口々聞こゆれば(と女房たちが口々に申し上げると)、

「*ただ、押し量りて(そなたたちで上手くお答え申し上げよ)。我は言ふべきこともおぼえず(私からは言う事はありません)」 *「ただ押し量りて」は注に<以下「言ふべきこともおぼえず」まで、落葉宮の詞。『集成』は「そなたたちのはからい次第に。よいように返事せよ、の意」。『完訳』は「私の気持を察して。宮は、母の死は夕霧との一件ゆえと思うので、応対する気にもなれない」と注す。>とある。発言文は字面よりも場に即した気持で言い換える、しかない。実際に宮が言った言葉は原文の通りなのだろうから。

とて(と言って宮は)、臥したまへるも*ことわりにて(横になってしまいなさるのも無理ないので)、 *「ことわりにて」は御息所が急死した経緯を女房たちは見知っているから、という事情を前提にした語り口、なのだろう。

「ただ今は(只今のところ宮様は)、亡き人と異ならぬ御ありさまにてなむ(故人同然の抜け殻状態でいらっしゃいます)。渡らせたまへるよしは、聞こえさせはべりぬ(殿がお見えなされた事は、お伝え申し上げますので)」

と聞こゆ(と少将の君は大将に申し上げます)。この人びともむせかへるさまなれば(近くにいる女房たちも泣いているようなので)、

「聞こえやるべき方もなきを(お慰めの申しようも無いが)。今すこしみづからも思ひのどめ(もう少し私も気を落ち着けて)、また静まりたまひなむに(また宮様も落ち着きなされた頃に)、参り来む(伺います、とお伝え下さい)。いかにしてかくにはかにと(それにしても、どうしてこんなに急に)、その御ありさまなむゆかしき(その御様子だけは知りたい)」

と*のたまへば(と大将が女房たちに仰ると)、*まほにはあらねど(ありのままではないが)、かの思ほし嘆きしありさまを(御息所が大将の不参を嘆いていらっしゃった様子を)、片端づつ聞こえて(小少将は少しだけ申し上げて)、 *「のたまふ」は大将が女房に<仰る>で、先の「聞こえたまへり」とは発言文の文意が違って「参り来む」は<伺います、とお伝え下さい>と言ったことになる。文字は客観表現なので、書き物にするといくらか違和感が生じるが、臨場表現の話し言葉や講談や語りでは、現代語でも普通に謙譲や尊敬の表現で関係性を保持し、確認し、以て社会生活が成立している。この持てる者と持たざる者との言語上の認識関係は、身分として固定するかどうかは別として、攻守ところを変えての攻防が人間社会の日常であってみれば、現代日本語にも同じ対立構造はあるし、日本語に限らず、謙譲や尊敬の表現は人間言語に普遍的にある構造特性であり、社会構造の特性を示してもいるのだろう。 *「まほにはあらねど」は<完全ではないが=全て残らずではないが>。「片端づつ(かたはしづつ)」は<一部分また一部分=部分部分を見繕って>。

「かこちきこえさするさまになむ(これを申しますと貴方様の悪口を申し上げるように)、なりはべりぬべき(なってしまいます)。今日は(今日はこのまま火葬の運びとなっており)いとど乱りがはしき*心地どもの惑ひに(余計に取り乱しそうに女房たちも間誤付いておりまして)、聞こえさせ*違ふことどももはべりなむ(間違ったことを申し上げかねません)。さらば(それでも)、かく思し惑へる御心地も(斯くも悲しみなさる宮のお気持も)、限りあることにて(切りはありませんので)、すこし静まらせたまひなむほどに(少し落ち着きなさった頃に)、*聞こえさせ承らむ(殿のお話しを申し上げ、また宮のお返事を承ろうかと存じます)」 *「こちども」は注に<女房たちの「心惑ひ」複数形。>とある。 *「違ふことども」は何も、大将に遠慮して御息所の死因をぼかした、ということではないだろう。確かに、御息所は大将の不参を嘆いて、その情けなさに気力を失い急逝した、ようには見える。今、この亡くなったその日に、この経緯だけを言えば、如何にも大将の所為で御息所は亡くなった、という言い方になる。また確かに、大将殿側の行き違いもあったし、そも大将の態度に問題はあるだろう。が、その事を死ぬほど気に病んだのは御息所自身の事情であって、現に一方の当事者の宮本人は死んでいない。御息所は元々重病だったがゆえに、その療養のためにこの小野山荘に来ていたのであり、大元の死因は病気であり、心労の核心も宮の将来への不安であって、その限りでは大将は脇役に過ぎない。 *「聞こえさせ承らむ」は注に<主語は少将君。少将君が落葉宮に夕霧の言葉をお話し申し上げ宮の返事を承りましょう、の意。>とある。

とて、我にもあらぬさまなれば(とって心ここにあらずの様子なので)、のたまひ出づることも口ふたがりて(大将も仰りたいことも言い出せず)、

「げにこそ(確かに今は)、闇に惑へる心地すれ(全てが混乱している)。なほ(ではまた)、聞こえ慰めたまひて(あなたから宮に慰め申し上げて)、いささかの御返りもあらばなむ(何かお返事でもあれば)」

などのたまひおきて(などと言い置きなさって)、*立ちわづらひたまふも(長話なさるのも)、軽々しう(立場上軽々しく)、さすがに人騒がしければ(なるほどさすがに葬儀ならではの慌しさなので)、帰りたまひぬ(お帰りをさいます)。 *「立ちわづらひたまふも軽々しう」は注に<『完訳』は「葬儀当日、縁者でもないのにぐずぐずしている自分を、高貴の身分柄、軽率と反省」と注す。夕霧の心中を地の文で語る。>とある。

[第九段 御息所の葬儀]

今宵しもあらじと思ひつる*事どものしたため(その際に大将は、今夜ではないだろうと思っていた火葬の準備が)、いとほどなく際々しきを(短時間で手際よく進められているのを)、いと*あへなしと思ひて(自分の世話いらずで事が進むのは、それは張り合いが無いとお思いになって)、*近き御荘の人びと召し仰せて(近くの栗栖野の荘園の者どもを呼び寄せなさって)、さるべき事ども仕うまつるべく(いろいろと面倒を見るように)、おきて定めて出でたまひぬ(指図なさってお帰りになりました)。 *「ことどものしたため」は<火葬の準備>らしい。「したたむ」は<整理する。処理する>とあって、準備を整える、でもあり、式次第を取り仕切る、でもあり、全てを処理して型を着ける、でもあって、ともかく格好を着けることではありそうだ。 *「あへなし」は「敢へ無し」で<張り合いが無い>。 *「ちかきみさうのひとびと」は注に<夕霧の荘園、栗栖野の人々。>とある。

事にはかなれば(急なことなので)、削ぐやうなりつることども(簡略になってしまう葬儀様式も)、いかめしう(厳かに)、人数なども添ひてなむ(参列者の体裁も着きました)。

大和守も、「ありがたき殿の御心おきて(有難い殿のご配慮です)」など、喜びかしこまりきこゆ(などと喜んで御礼申し上げます)。

「名残だになくあさましきこと(亡骸さえ消えてあつけないものだ)」と、宮は*臥しまろびたまへど、かひなし(と宮は身をよじってお泣きになるが、どうにもなりません)。親と聞こゆとも(親と申しても)、いとかくは*ならばすまじきものなりけり(こうまでも頼り切るべきものではないのです)。見たてまつる人びとも(お世話申す女房たちも)、この御事を(この宮の頼りなさを)、*またゆゆしう嘆ききこゆ(それはそれで心配申し上げます)。*「ふしまろぶ」は<体を地に投げ出して転びまわる。>と古語辞典にある。*「ならばす」は「慣らふ(慣れ親しむ)」(の未然形)+使役の助動詞「す」が付いた<慣れ親しませて置く>という言い方で、此処の「す」の語感は<放置する=成り行き任せで自覚しない>だから、「親に馴れる=頼る」ままに<自覚がない>というのは<自立しない=過保護>のことを言っているのだろう。「なりけり」は<~というものだ>という断定口調。昔は一部の貴族の問題が、今では社会問題だという、この今日の社会の豊かさは幸福なのか。*「また」は<それもまた、それはそれで>。

大和守、残りのことどもしたためて(大和守は葬儀の後始末をし終えて)、「かく心細くては(このような心細い山荘暮らしでは)、えおはしまさじ(堪えていらっしやれないでしょう)。いと御心の隙あらじ(とても御気分が紛れますまい)」など聞こゆれど(などと申し上げたが)、なほ(宮はそれでも)、峰の煙をだに(霧が峰をせめて母上の火葬の煙と)、気近くて思ひ出できこえむと(身近に思い出し申したいと言って)、この山里に住み果てなむと思いたり(この山里に死ぬまで住もうとお思いでした)。

*御忌に籠もれる僧は(御忌籠もりの僧は)、*東面(東側の廂や)、そなたの*渡殿(その近くの廊下部屋や)、*下屋などに(奥の小屋などに)、はかなき隔てしつ(簡単な仕切りをして)、かすかにみたり(ほんの数人が残っていました)。西の廂をやつして(西の廂の飾り付けを取り払って)、宮はおはします(宮は住んでいらっしやいます)。明け暮るるも思し分かねど(宮は日を数えることもなさらないが)、月ごろ経ければ(時は過ぎ行き月をまたいで)、長月になりぬ(九月になりました)。*「おんいみ」は注に<『集成』は「死穢のため、三十日間、近親者が忌に籠る」。『完訳』は「喪中の四十九日間」と注す。>とある。「御忌に籠もれる僧」のことを此処で語る意味は、御息所の死後の山荘は平癒祈願の祈祷所から、成仏安寧の念誦堂の趣に変わって来ていた、という説明描写と読むべきなのだろうか。*「ひんがしおもて」は祈祷所になっていた所。今は仏壇仕様で閑散としているのだろうが、祈祷中の僧たちは何処で寝泊りしていたのだろうか。仮眠所から祈祷所に出てくる時に律師が西廂から出て行く大将を見かけた、という記事が二章二段にあったが、仮眠所の位置関係は不明のまま。*「わたどの」は<屋根付き廊下>とあるが、廊下に面した小部屋もあったようだ。また、廊下は別棟に渡る通路ではあるだろうが、別棟が必ずしも対屋というわけでもないだろうし、玄関への中門廊も渡殿だ。*「しもや」は<寝殿造りのおもな建物の後ろにあって、女房・童など召使がいる建物。また、雑物を置く建物。>と古語辞典にある。この山荘に対屋はあったのだろうか、主殿のほかは下屋だったのだろうか。山荘を街区の寝殿造り様式にする必要もないだろうし、寝殿造り様式自体もおよその規格や典型例はあるだろうが、邸宅であってみれば各個の居住事情に応じて実施が違ってくるだろう。尤も、どういう実体であろうと、その空間規模や動線を理屈の上で理解するだけで、私には貴族邸宅の生活実感などある筈は無い。